

愛知医科大学 学報



中央棟14階から望む夜景
(名古屋方面)

＝ 第136号 ＝

2014. 10月

愛知県長久手市岩作雁又1番地1
〒480-1195

学校法人 愛知医科大学

愛知医科大学ホームページアドレス
www.aichi-med-u.ac.jp

■ 主な目次 ■

平成27年度予算編成方針……………	2
平成26年度総合防災訓練……………	3
平成27年度大学院入試……………	6
コンケン大学医学部短期留学体験記……………	10
医学部学外体験実習……………	12
教育・研究最前線……………	30

平成27年度予算編成方針

日本経済は、緩やかに回復しつつあるとされていますが、「社会保障と税の一体改革」、経済再生と財政健全化の両立を目指し、消費税率は平成26年度に引続き、平成27年10月に10%に引き上げられることが予定されています。

消費税の本学負担は、主な収入である学納金、医療収入等が、非課税収入とされ、消費税を転嫁することができない仕組みとなっています。一方、医薬品や医療材料、給食材料等の購入については消費税が課税されているため、大学が最終消費者として消費税を負担する形になっています。平成26年度に8%に引き上げられた消費税負担額は、診療報酬に加算したとされていますが、不十分で実質的に年5億円程の負担増となっています。10%の税率となりますと仮に本学の活動が平成26年度と同規模だとしても6割増の8億円近い負担となり、これに事業拡大に伴って消費税負担は更に増加することから、確実に本学の財政負担要因となります。

この負担増を乗り越え、本学が永続的に発展・成長し続けるためには、まさに「財の独立なくして学の独立なし」であることから、安定した財政基盤の構築を図っていくことが必要となります。

平成26年度の収支見込は、5月の新病院開院準備等で4月は低調となり、6月以降の奮起を期待したところですが、予算の帰属収支差の確保には相当の頑張りが必要です。更に、将来の財政基盤の安定を図っていくためには支出の8割強を占める人件費と医療経費についても、適正化と効率化の手を緩めることはできませんが、一方で人事院勧告は久々に引き上げる内容となっています。

来る平成27年度は、新病院を含む周辺の施設整備も一通り終わり、工事はAB病棟の解体を残し平年度化することから、新病院を中心に地歩を固め、更なる飛躍を期

すため、まずは病院の機能を最大限に発揮すべく、効率的で高収益体質の構築に繋がる事業を優先し、他の財政支出は事業項目の見直しと効率化を図ることとします。

私立医科大学をめぐる環境は一段と厳しさを増し、医学部の定員増による競争環境の激化の中、国は医師不足の解消が喫緊の課題であり、地域の医師確保等の観点から、特例を設け入学定員の増加を取り扱うこととしました。本学は医学部入学定員の「愛知県地域特別枠入学」の募集人員を拡大し、地域の医師確保等に努めることとします。

一方、病棟跡地利用として教育環境の充実を図る目的で整備を進めてきたC・D棟の施設改修、研究環境の充実を図る目的で整備を進めてきた2号館3号館の施設改修も終了し、教育・研究環境が大幅に改善されることから、今後は質の高い医療人の育成を図るとともに、研究推進のための競争的研究資金の獲得、研究活性化を図る方策の展開を目指します。

もとより、教育機関が教育・研究活動の活性化を図り、質の向上に努めるとともに、社会的責任を果たしていくためには、不断の自己点検を行い、改善への努力を行っていくことが必要です。特に、地域社会との連携強化と貢献を目指し、「社会から評価され、選ばれる医科大学」であり続けるために、社会情勢、医療環境の変化に迅速に対応し、常により高度の目標に向けて発展するよう対策を推し進めることとします。

なお、借入金の返済ピークが平成29年度となること、平成27年10月からと見込まれる消費税率アップにも対応できるよう、できるだけ資金積み上げを行うべく、平成27年度も特殊要素（新規減価償却費分）を除き、平成25年度と同等条件下で引き続き黒字予算の成立を図ることとします。

役員・評議員の異動

平成26年9月29日（月）に理事会が開催され、次のとおり評議員の選任等を行いました。

【評議員】

- | | |
|----|--|
| 辞任 | 鈴木好人氏、野田正治氏（平成26年9月30日付） |
| 選任 | 黒江幸四郎氏、笹本基秀氏（任期：平成26年10月1日～平成28年1月27日） |

野浪敏明理事・評議員は、平成26年9月30日付退職に伴い、理事・評議員を退任

平成26年度総合防災訓練実施

学校法人愛知医科大学消防計画第69条に基づき、平成26年10月16日（木）に教職員、学生を始め、近隣の医療機関及び消防本部救急隊など関係機関を含む約1,000人の参加協力を得て、平成26年度総合防災訓練を実施しました。

訓練は、午後2時に南海トラフ地震でマグニチュード9.0、長久手市で震度6強の地震を観測。病院機能は一部麻痺しているものの、患者の受け入れは行える状態を想定の下で行われました。訓練会場については、今年度は新病院（中央棟）の開院に伴い、病院災害対策室を中央棟3階の共同カンファレンスルームに設置するとともに、トリアージ訓練についても中央棟及びその周辺で実施しました。

訓練は、本部共通訓練と部門個別訓練に区分され、本部共通訓練では、新たな安否確認システムを活用した職員の安否状況確認を行いました。訓練当日は、各対策室から職員の安否情報の確認を体験して頂きました。

また、部門個別訓練では、各災害対策室がそれぞれ独自の訓練を展開しました。病院災害対策室では、職員、学生の他、近隣医療機関や救急隊等も加わり図上訓練及びトリアージ訓練を実施しました。

医学部・看護学部災害対策室では、学生の避難誘導訓練及び災害に係る講演を実施し、法人本部災害対策室では、施設被害状況調査、電源確保対策、ガス供給対策、病棟調査、患者搬送及び初期消火訓練を実施しました。

今年度の訓練では、災害宣言放送等が防災センターの放送設備の異常により定刻に放送ができず、このため各棟にある個別放送設備からの放送やハンドマイクによる周知等に急遽切替えて対応しましたが、情報伝達に課題が残る結果となりました。また、検証会では、役割分担の明確化や指揮命令系統の確立が今後の課題として指摘されました。

今後とも、こうした課題を解決し、いざという時に役立つ訓練としていくため、より一層実効性のある訓練の実施に努めてまいります。



災害対策本部



病院対策本部



防災訓練の様子

災害時における備蓄品を整備

本学では従来から、災害時における患者用の備蓄品として、非常食を3日分準備しておりますが、教職員の備蓄品がなかったため、新たに教職員用として3日分の非常食を整備しました。

この非常食は、十分なカロリー計算に加え、食べやすい食材にも配慮しました。近い将来、必ず来ると言われている南海トラフ巨大地震に備えた各種整備を今後も進めていきます。



防災訓練では災害備蓄品が紹介されました

新安否確認システムの構築

新病院は免震構造となり震災に強い建物となりましたが、大規模地震等災害発生時に災害被害を最小限に留め、事業を継続・早期再開するためには、職員の被災状況をいち早く収集・把握し対応することが求められています。

現行の安否確認システムは、セキュリティが脆弱で、事務処理の迅速性等に課題があったため、平成26年9月から新たな安否確認システムの導入を行いました。

新安否情報システムは、管理者が各災害対策室から、または学内にいなくても、データセンターにアクセスす

ることにより、リアルタイムで職員の安否情報を把握し、情報を発信するなど、災害時の体制づくりに大いに活用できるものとなっています。

同システムを構築し、平成26年10月から本格稼働を始めましたが、システムがより有効に機能するためには全職員の登録が必要不可欠です。現在、職員の約50%が登録を済ませていますが、全職員の登録に向けて周知を徹底していきます。

2020年東京オリンピック・パラリンピック 大学連携協定を締結

本学は、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会の成功に向けて、一般財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会と連携協定を締結しました。

この協定には、「人的分野及び教育分野」、「オリンピック・パラリンピック競技大会に関わる研究分野」、「オリンピック・パラリンピック競技大会の国内PR活動」、「オリンピックムーブメントの推進及びオリンピックレガシーの継承」の四つの項目に関する連携が含まれており、相互に連携・協力体制を構築することを目的としています。



平成26年度第1回中部研究支援実務者連絡会

平成26年8月4日（月）7号館（医心館）多目的ホール1・2において、平成26年度第1回中部研究支援実務者連絡会が、本学を幹事校として開催されました。

本連絡会には、本学を含む県内の13私立大学が加盟しており、研究の側面的支援に関する実務及びその他大学一般に関する業務についての情報交換等を行うことを目的に、各大学の研究支援部門の実務者が参加して、年2回開催されています。

始めに、佐藤啓二学長から、「本日の連絡会を今後の研究支援体制作りにおいて、大いに実りあるものにしてもらいたい。」とのあいさつがあり、その後37名の参加者による活発な情報交換や討論が展開されました。

今回の連絡会は2部構成で行われ、第1部では、「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン（実施基準）」の改正に伴う各大学の取組状況等についてのディスカッションが行われました。



あいさつする佐藤学長

引き続き第2部では、研究を支援する上で発生した問題点等に関する各大学の対応方法などについてのディスカッションや質疑応答が行われ、とても意義深い連絡会となりました。

平成27年度科学研究費助成事業応募説明会等 開催

平成26年8月20日（水）から22日（金）の3日間、大学本館304講義室において、若手研究者向けの平成27年度科学研究費助成事業応募に向けた学内説明会が開催され、計30名の出席者がありました。

この学内説明会は、今後、本学での活躍が期待される若手研究者を対象に、科研費の制度や応募方法等についての情報交換を目的として開催されたものです。

また、平成26年10月2日（木）・3日（金）の2日間、同会場において科研費への応募を予定している研究者を対象とした平成27年度科学研究費助成事業応募方法等説明会が開催され、計43名の出席者がありました。

両説明会とも、総務部研究支援課の古山昂勢主事から説明があり、終了後には出席した研究者から応募等に関する多くの相談が寄せられるなど、大変意義のある説明会となりました。



本学では、今後も若手研究者の活躍と科研費を始めとする競争的資金獲得に向けて、一層の支援を行っていきます。

平成26年度愛知医科大学公開講座終了

平成26年9月6日（土）・13日（土）・20日（土）・27日（土）の計4回にわたり開催された、平成26年度愛知医科大学公開が終了しました。

今年の公開講座は、5月9日に開院した新病院をより詳しく知って頂くために「新病院で提供される最先端医療」というテーマで開催し、開催期間中は、近隣住民の

方を始め、4日間で延べ566名の方々に参加頂きました。

また、4日間全てに出席頂いた54名の方々には、最終日となる27日の講座終了後の閉講式において、佐藤啓二学長から修了証書が手渡されました。

来年度も皆さまの生活に役立つ公開講座を企画・運営していきますので、多くのご参加をお待ちしております。

看護学部事務室の再編成に伴う事務室拡張工事

平成26年9月16日付けの看護学部事務組織の再編成に合わせて、4号館（看護学部棟）玄関ホールの事務室拡張工事を実施し、3号館（基礎科学棟）と4号館にあった各事務室を1ヶ所に集約しました。これは、事務体制を見直すことにより、業務を効率的かつ正確、迅速に執行できる体制を構築することで、看護学部の教育・研究

支援の円滑化を図るものです。

また、事務室拡張に伴い、4号館玄関ホールにあった就職コーナーは、3号館学生ホールを拡張の上、新設しました。

今後も、教育・研究支援体制の更なる充実と学生支援の向上を図っていきます。



看護学部事務室



新設した就職コーナー

平成27年度大学院医学研究科入学試験 第61回論文博士外国語試験実施

平成26年10月3日（金）大学本館303講義室において、大学院医学研究科入学試験及び第61回論文博士外国語試験が行われました。受験者数は、大学院医学研究科入学試験が9名、論文博士外国語試験が8名となりました。

このため、本研究科では、まだ入学定員に満たないことから、第2次募集を予定しています。

また、本研究科では、これまで社会人入学制度や学納

金減免制度の拡充などを行い、大学院教育を受けやすい環境を整えてきましたので、研究意欲の高い方が多数応募されることを期待しています。

なお、大学院医学研究科入学試験（第2次募集）及び第62回論文博士外国語試験は、平成27年2月6日（金）に実施予定です。

平成27年度大学院看護学研究科入学試験

平成26年9月4日（木）に大学院看護学研究科入学試験が実施されました。

当日は、一般選抜（高度実践看護師コース）2名、社会人特別選抜10名の合計12名が試験に臨み、受験生たちは緊張した雰囲気の中、真剣なまなざしで試験問題に取り組んでいました。

本研究科では、これまで医療等の現場で活躍されている方々が、退職したり休職したりすることなく学べるよう、平日の夜間や土曜日などにも講義、研究指導等を行っております。更に、平成27年度入学生からは、勤務や育児などの事情により標準修業年限での履修が困難な方

を対象とした「長期履修制度」を新たに導入し、社会人がより学びやすい教育環境を整えました。

なお、大学院看護学研究科入学試験（第2次募集）は、平成27年2月5日（木）に実施予定です。

【看護学研究科入試結果】

○志願者	12名
○受験者	12名
○合格者	9名

平成26年度看護実践研究センター 認定看護師教育課程入学式挙行

平成26年9月8日（月）午前10時15分から医心館1階多目的ホールにおいて、看護実践研究センター認定看護師教育課程の平成26年度入学式が挙行されました。

式は、開式の辞に続き、感染管理分野13名及び救急看護分野15名の新入学生が紹介された後、新入学生を代表して、感染管理分野入学生の服部清美さんから「課程設置規程並びに諸規則等を守るとともに、認定看護師を目指す学生としての本分を尽くすことを誓います。」と宣誓が行われました。

次いで、白井千津センター長から「教職員が皆さんをサポートしていきますので、本学の教育環境を十分活用し、大いに勉学に励んでください。」と告辞があり、続いて、佐藤啓二学長から「チーム医療によって、より質の高い医療を提供していくために、認定看護師がチーム医療の要になることを期待していますので、優れた認定



あいさつする白井センター長

看護師になることを目指し、しっかりと学んでください。」との式辞がありました。

最後に課程の教員紹介があり、午前10時40分ごろ式は終了しました。

平成26年度医学部解剖慰霊祭挙行

秋晴れの好天に恵まれた平成26年10月24日（金）覚王山日泰寺において、平成26年度医学部解剖慰霊祭が、本学から医学部長及び解剖学講座を始めとする関係教職員約30名、それに医学部2学年次生119名、看護学部1学年次生4名が参列する中、350名余りのご遺族をお迎えして厳かに執り行われました。

今年度の慰霊祭では、平成25年10月からの1年間に系統解剖と病理解剖にご遺体を供せられた63柱の御霊を新たに合祀し、総数4,791柱の御霊に対し法要が営まれました。

午後2時、導師の入堂により祭儀が始まり、岡田尚志郎医学部長と北村直哉不老会理事長の慰霊の辞、続いて、学生代表として医学部3学年次生の久徳綾香さんが「実習が始まり、初めてご遺体と向かい合った時の身の引き締まる思いは今も忘れることができません。そして、実習を終えた現在では、他では得難い経験をさせて頂き、無限ともいえる学びを得られたことを感じ、感謝の気持ちで一杯です。見ず知らずの私たちの研鑽のためにご献体下さいました御霊の崇高な思いを胸に刻み、そのご厚情にお応えするためにも、私たちは日々精進を怠らないことをここに誓います。」と礼辞を述べ、御霊に深い感



黙とうを捧げる学生たち

謝と尊崇の念を捧げました。

この後、広い本堂に僧侶の読経が響きわたる中、岡田医学部長、解剖学講座を代表して中野隆教授、病理学講座を代表して佐賀信介教授、学生代表として医学部3学年次生の福井隆彦さんがそれぞれ焼香し、その後、参列者一人ひとりが焼香して献体者のご冥福を祈りました。

午後3時、岡田医学部長の参列者に対する謝辞をもってつつがなく慰霊祭が終了し、参列者は、学生が見送る中を帰路につきました。

Advanced OSCE実施

平成26年7月26日（土）大学本館講義室及びセミナー室において、医学部6学年次生を対象に「Advanced OSCE」が実施されました。

「Advanced OSCE」は医師としての臨床能力を評価する試験として、多くの医科系大学で導入されており、本学では、昨年度から導入されています。

昨年度はトライアルとして、「胸部診察」と「腹部診察」の2ステーションで行われましたが、今年度からは、正式導入となり、「Advanced OSCE」の評価は、各診療科における臨床実習（クリニカル・クラークシップ）の評価と併せて、臨床実習の単位認定に含まれるとともに、臨床実習の最終試験として位置付けられています。

今年度は、「胸部診察」、「腹部診察」、「頭頸部診察」、「救急」の4ステーションで行われ、医学部教員31名がそれ



ぞれのステーションに分かれて評価を行いました。また、各ステーションのシナリオは、担当教員と医学教育センターの教員でブラッシュアップを行いました。

なお、模擬患者等として、医学部5学年次生101名も参加し、翌年に迫るOSCEを体験しました。

秋の交通安全講習会開催

平成26年10月20日（月）午後5時から大学本館302講義室において、名東警察署交通課長の橋本博史警部を講師に迎え、医学部・看護学部の学生を対象とした交通安全講習会を実施し、40名の参加がありました。

講師からは、現在愛知県が交通死亡事故No.1であること、名東区管内でも毎日9～10件の交通事故が発生し、2～3名の人が怪我をしていることの説明があり、事故が最も多いのは交差点で、交差点は危険地帯と認識してほしいとの話がありました。

引き続き、「どう防ぐ交差点事故/事故現場に学ぶ」と題したDVDを鑑賞し、交差点はいかに危険か、また、自分が違反をしていなくても、事故になることがあることを実感させられました。

年に2回、春と秋に実施している交通安全講習会を通じて、交通安全に対する意識を常に高く保ち、受講した学生一人ひとりが交通安全に努めてくれることを期待します。

医学生の学会発表報告会実施

「医学生の学会発表に係る旅費の支給制度」を利用して、平成26年3月27日（木）から29日（土）に自治医科大学で開催された第119回日本解剖学会全国学術集会で発表した医学部3～5学年次生4名による学会発表報告会が、平成26年10月30日（木）午後5時から大学本館204講義室で開催されました。

この報告会は、主に低学年次を対象に、勉学に対するモチベーションを高めるための一助とすることを目的として実施し、1～3学年次生20名が参加しました。

報告内容としては、具体的な発表内容や発表までの経緯、学会での雰囲気等、写真などを交えての分かりやすい説明でしたが、会場には佐藤啓二学長を始め、多くの教員が参加されていましたので、発表する学生は少々緊張気味でした。また、報告会終了後には多くの質問が飛



び交い、熱気溢れる様子でした。

この報告会が、勉学に対するモチベーションの向上と、幅広い視野を持つ医学生へ成長するきっかけとなることを期待しています。

平成26年度医大祭 “DO YOU ENJOY ? ”

平成26年度の医大祭のテーマは「DO YOU ENJOY ? 」です。医大祭の開催も今回で41回を数え、新病院も開院し、新たな一歩を踏み出すのに相応しい医大祭にしようと医大祭実行委員もがんばっています。

平成26年11月1日（土）と2日（日）に行われる主なイベントは次のとおりです。

【主なイベント紹介】

☆2日間開催イベント

- ・模擬病院
- ・模擬店
- ・看護イベント
- ・病院イベント
- ・学生イベント

11月1日（土）のイベント

- ・松木安太郎氏（サッカー解説者）講演会

11月2日（日）のイベント

- ・リサイクルマーケット
- ・スタンプラリー
- ・ジャンピングバルーン
- ・献血・骨髄バンク登録



中国寧夏医科大学病院 看護部幹部職員の来学

平成26年9月4日（木）・8日（月）の両日に、寧夏医科大学病院看護部の芦鴻雁（ロウコウガン）看護部長・教授を始め、8名の職員の方々のご来学されました。本学とのコネクションは、看護学部実習指導員の周馨麗（シュウケイレイ）先生からのご紹介です。

今回は、芦看護部長ご自身の日本への留学経験（広島大学博士課程）を通して感じた、日本の看護の「きめこまやかさ」や「配慮」などを体験するためにご来学されました。

新病院の見学では、院内を隅々まで回られて、芦看護部長を始めとし、多くの質問を頂きました。

また、佐藤啓二学長への表敬訪問の際には、寧夏の歴史や、病院についてご紹介下さいました。



寧夏医科大学の皆さんとの記念撮影

寧夏（ねいか）医科大学病院：特定機能病院・先端医療レベル・3,233床（看護師数2,300人）

位置：四川省の西北「寧夏回族自治区」、県庁所在地：銀川市

人口：約630万人、35種類の民族が共生、漢民族460万人、回民族219万人

※ 日本との関わりは、井上靖著「敦煌」や三蔵法師のロケ地など

平成26年度看護学部キャンドルセレモニー挙行

平成26年10月11日（土）午前10時から大学本館たちばなホールにおいて、2学年次生を対象とした『平成26年度看護学部キャンドルセレモニー』が挙行されました。

当日は、衣斐達看護学部長から、「使命感を持ち、常に進歩し続け、愛に満ち、知識と技術を兼ね備えた人間性豊かな看護師を目指すことをナイチンゲールに誓い、看護師としての決意を新たにしてください。」との式辞が述べられ、続いて、小池三奈美看護部長から、「キャンドルセレモニーで灯した明かりを看護の力の明かりとし、人々の心や命にもその明かりを灯していけるように勉学と技術の向上に励んでください。そして社会の期待に応える看護の仲間として、共に働けることを楽しみにしています。」とのメッセージが学生たちに贈られました。



引き続き行われた『キャンドルサービス』では、学生一人ひとりが八島妙子教務学生部長から手渡された燭台に、ナイチンゲール像から灯火を受け継ぎ、104名全員で『誓いの言葉』を述べ、愛知医科大学看護の歌『愛の使命』を合唱し、10時50分にセレモニーは無事終了しました。

このキャンドルセレモニーは、ナイチンゲールの精神を受け継ぎ、看護職者となるための決意を新たにする場として2学年次の実行委員が中心となって企画し、学生たちが一致団結して運営しているものです。これを機に、これから本格的に始まる看護学の勉学に一層力を注ぎ、心豊かな看護職者へと育ってほしいものです。

コンケン大学医学部短期留学体験記

本学では、コンケン大学（KKU）医学部と平成23年度に学術国際交流協定を締結して以降、教育と研究における国際交流の促進を目指し、積極的に学生等の交流を行っており、プログラムの一環として、臨床実習選択（elective）コースへ本学医学部学生を派遣しています

平成26年度のプログラムとしては、平成26年8月2日（土）から8月31日（日）まで1名、同日から8月18日（月）まで2名、8月16日（土）から8月31日（日）まで3名の計6名の学生が留学しました。

この留学を終えた学生から寄せられた体験記をご紹介します。

「KKU臨床実習選択コース」への派遣者

医学部5学年次生 柿崎 結美

私は、8月2日から8月31日の約1か月間、コンケン大学医学部産婦人科で研修をさせていただきました。コンケン大学医学部では、4年生から臨床実習が始まり、積極的に問診から身体診察までします。産婦人科を4年生で3か月、6年生で1か月半実習するため、学生でも知識と経験が豊富で、日本の臨床実習ではなかなかできない内診や経膈分娩の介助も経験することができました。普段から英語で症例発表をする機会が多く、なかなか英語を使う機会の少ない日本での教育とは異なる点でした。

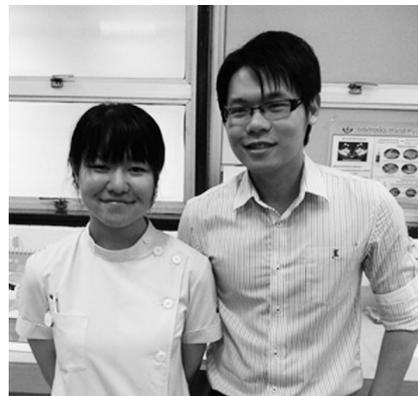
旅行で何度も日本に来たことのある学生もいるくらい日本に興味を持っている学生が多くいて、タイ料理のお店や市場を案内してもらったり、ホームパーティーに招待してもらったり、とても親切にしてもらえました。土日や祝日は2泊3日でバンコクに旅行に行く機会もあり、勉強だけでなく観光もできたのでより楽しい思い出になりました。



柿崎さん（左から3人目）

医学部5学年次生 谷口 奈都希

今回、コンケン大学医学部に留学させていただきました。タイの病院の実情、文化、病気の違いなど、すべてが興味深いことばかりでしたが、特に感じたのは医学生士の知識の豊富さです。タイでは、4年生から6年生までの3年間、ほぼ休みなしに日本の研修医レベルの病院実習を行います。産婦人科の期間は3か月間ですが、私の加わった班は2か月の実習を終了しており、圧倒的な知識と診療技術を持っていました。また、タイでは表現や病名に英語を用いることが多く、英語の日常会話が不得意な学生でも症例勉強会では、英語で活発に発言していたのが印象的でした。2週間という短い期間でしたが、貴重な経験をさせていただきました。



谷口さん（左）

医学部5学年次生 野々部 恵

コンケン大学医学部産婦人科に2週間実習で留学しました。手術や分娩といった外科的なことから外来や妊婦健診まで、色々な診療に参加することができ、とても良い経験になりました。産婦人科にいた学生、研修医、先生方は皆とても優しくフレンドリーで多くのことを教えて下さり、とても楽しい実習となりました。

タイの学生は、実際の臨床的手技を多く任されていて、私たちよりもはるかに経験や知識が豊富でした。現在、私自身も臨床実習の最中であるため、とても良い刺激を受けました。



野々部さん（左から2人目）

医学部5学年次生 間瀬 宏美

私のコンケン大学医学部救急救命科での実習は、とても充実した短期留学でした。基本的にはレジデントに同行し、2週間で受けた症例の説明は140件近くです。脳梗塞から外傷、CPAまで様々な症例を説明してもらいました。手技もいくつか体験させてもらい、このような実習をサポートしてくれたレジデントの方々には本当に感謝しています。タイの人達はとても日本に好意的で、アニメはもちろん、日本の歌が歌えると言って演歌も披露してくれました。救急救命科の方たちは、皆さん面白く良い人ばかりです。来年もぜひ実習に行きたいと思いました。



間瀬さん（中央）

医学部5学年次生 船越 一輝

コンケン大学医学部への留学では、医学の異文化交流を多く垣間見ることができました。医療における考え方の違い、考えなくてはならない疾患の違い、やはり国によってそれぞれなのだと思います。

また、教育に関しては毎朝実施される朝の回診など、患者さんと学生が接触する機会が多くあり、とても良いと思いました。タイの友人はとても友好的で、お互いタイと日本の様々なことについて質問し合いました。授業後には、色々遊びに連れて行ってもらい、とても楽しかったです。大切なことは正しい英語ではなく、間違っても良いから意思疎通しようという気持ちなのだと今回は強く思いました。また行きたいです。



船越さん（左から6人目）

医学部5学年次生 水野 幸奈

私は、内科学（自己免疫疾患・リウマチ内科）で実習をさせて頂きました。病院では、強皮症クリニックの外来を見学し、学生とともに患者さんの病理標本を見ました。また、実際に患者さんの関節の触診や、血糖の測定もさせて頂きました。

タイは仏教国なので僧侶専用の病棟があり、そこへ回診に行く機会もあり、タイの文化に触れ合えたと感じました。また、実習の後は学生とマーケットに行き、週末にはバンコクへ旅行に行ったりと充実した時間を過ごせました。異国の土地で過ごすことは不安でしたが、タイの人々は親切で毎日楽しく学ぶことができ、タイという国がとても好きになりました。

この時期に外国における実際の医療現場を見ることができたことは、今後勉強し実際に実習する上でも貴重な機会だと感じました。



水野さん（右から3人目）

医学部学外体験実習

近隣の老人保健施設や病院等にご協力頂き、医学部学生が学外体験実習を行いました。本院以外での実習は、学生にとって貴重な体験となったようです。実習を終えた学生の感想文をご覧ください。

高齢化社会と医療について考える

実習施設：老人保健施設 すこやか荘
3学年次生 山崎あすみ

高齢化社会と称され、近い将来は超高齢化社会になるであろうことが予測されている現在。実習の初日に、私たちが訪れた老人保健施設すこやか荘の院長先生に、「あなたたちが今後何科に進もうと、高齢者に対する医療や介護は避けては通れない道だ。」と言われたことが深く心に刺さりました。

院長先生自身、今年で76歳になられる、すなわち高齢者と称される御方であるのに加え、昨年には大腸がんを患い入院を余儀なくされた身であります。また、現役医師として50年以上培われた経験を基に、高齢者に対する医療や介護に対して真摯に向き合っていることが伝わってきました。

すこやか荘は、福祉施設の中でも介護老人保健施設という区分に分類される施設で、介護保険制度にて運営されています。そのため、入所対象となる方は介護保険が適用される方、すなわち要介護1～5に認定されている方です。また、施設の運営目標として、入所者の方の在宅復帰を目的としているとのことであったが、実際には、在宅での介護が困難な家庭が多く、在宅復帰される方はごく少数で、中には施設で看取りを行った例もあるそうです。

実習期間中の3日間、介護の現場において私のような学生にできることは限られており、食事介助や入浴介助もただ見学することしかできませんでした。とは言え、せっかく実習のチャンスが与えられたのだからと思い、とにかく入所者である高齢者の方々とコミュニケーションを取ることを心掛けました。もちろん、中にはうまく言葉を話せない方や耳が遠い方もいらっしゃいましたが、とにかく話しかける機会はたくさんあったので、自分が担当した階に入所している皆さんには、全員声を掛けることができましたと思います。

明るく笑って言葉を返してくれる方、「あなたも大変ねえ。」とお心遣いを下さる方、穏やかにニコニコしてくれる方、ご自身の身の上話を聞かせてくれる方など反応は人それぞれでしたが、初対面の私にも優しい反応を返して下さる方々ばかりで、とても胸が熱くなりました。また、心なしか1日目よりも2日目、2日目よりも3日目と時間を経るごとに皆さんの反応が良くなった気がして、自分が少し受け入れられたようで、それもまた少し嬉しかったです。

その一方で、すこやか荘の入所者の一人であるAさんの話が心に残っています。Aさんには、2人の息子がいましたが、次男には先立たれ、長男も脳梗塞を患ってしまったため、長男を初め長男の家族はその介護で手一杯となり、Aさんの面倒まで見切れなくなったそうです。最終的には、長男の娘（Aさんにとっての孫）にもいらないと言われ、私はこの先どうしたらいいのか、身の振り方について悩んでいるということでした。

唐突にお話しされたので、私も返す言葉が見つかりませんでした。後々になって考えてみればAさんのような高齢者は少なからずいると思う。Aさんの場合は、すこやか荘のような施設に入所できる環境にあっただけでも、まだ良い方なのかもしれません。先だって院長先生の言われた「高齢者に対する医療と介護と向き合わねばならない。」という言葉の中には、こういった現実とも向き合う必要があるという意味も含まれているのだと思います。

この3日間を通して、高齢者の方々と少しの間でしたが、コミュニケーションを取れたことは私自身の励みになったこともあったし、考えさせられることもあった。そして、そうした高齢者の方々を支える介護の現場での職員さんの努力やチームワークを目の当たりにできてよかったと心の底から思います。

すこやか荘の職員の皆さんを始め、入所者の皆さんには深くお礼申し上げます。ありがとうございました。



診療現場を通して学んだこと

実習施設：橋本整形外科クリニック

4学年次生 高畑 恭兵

今回の学外実習では、橋本整形外科クリニックにて実習をさせて頂きました。整形外科クリニックでの初めての实習ということもあり、充実した実習をすることができました。

実習内容は主に診察の見学、処置室の見学、リハビリの見学です。2日目には、先生が執刀される手術の見学もさせて頂きました。リハビリの見学では、思いのほか患者さんが多いこと、また、患者さんの疾患、外傷が多様であることを学びました（患者さんは運動療法だけではなく、電気療法、ホットパックを用いた温熱療法などの治療を受ける方もかなり多くいらっしゃいました）。実際に、患者さんを相手に超音波治療器の体験をさせて頂くこともできました。処置室見学では、主に点滴の見学をさせて頂きました。

また、患者さんを相手に血圧を測ることもさせて頂きました。血圧自体は正確に測ることができたものの、最初はマンシットを巻くのに一苦労した点では、医師としての勉強がまだ座学でしかないことを痛感させられました。滞りなく診療ができるよう、手技を身につける動機付けになりました。

一番驚かされたのは、診察の見学でした。先生が正確に、かなりのハイペースで診察・処置を進めていくことに対し、私はついていくことができませんでした。患者さんの話を聞き、適切な身体診察を行うと、レントゲン撮影のオーダーを出す。この動作が、本当にてきぱきとしています。息をつく暇もなく、次から次へと診察をこなしていく先生でしたが、「速くやることが必ずしもいいわけではない。正確な診断を下して、患者さんを治療していかなければならないのだから。」とおっしゃっていました。

忙しい診察の合間に先生から、「今の患者さんの鑑別診断は何か」、「手根管症候群はどの神経が障害を受けるか、診察所見は何か」、「手根管症候群で頸部の診察を行ったのはなぜか」、「手根管症候群の主な原因は」と質問を受けるものの、答えられない自分を情けなく思いました。

運動器が苦手な分、勉強をし直す必要性も感じました。先生はてきぱきと診察をしていく中でも、頭の中では論理的に鑑別診断をしており、その的確さは流石であると感じました。先生曰く、「20年近く患者さんを診続けた賜物」なのだと言います。

2日目には、先生が執刀される手術を見学しました。手術の見学は初めてで、緊張しながらの見学でした。一緒に実習をした友人が代表で直接介助に入ることになり、手洗いで何度も先生に注意されているのを見て、「清潔」を保つことの大切さを感じました。手術での先生の

仕事は非常に繊細で丁寧なものでした。尺骨にあてる金属プレートの微調整を時間をかけて何度も行い、縫合もとても丁寧に行っていました。開業医の先生が休診している間にこのような手術を行っているのは意外でした。

3日間の実習を通して、今自分が学んでいること、これから学んでいくことの重要性がよくわかりました。例えば、上記の手根管症候群は疾患の知識としては基本的なものであり、今回の患者さんも典型的な症状でした。また、手術における手の消毒は、患者さんの生命に直接かかわっています。

医学の知識は膨大であり、「習ったのは覚えているが、正確な知識が思い出せない。」のが私の現状です。正しい知識がなければ患者さんの診断・治療はできませんし、手技ができなければ、患者さんの命を預かることはできません。

医師として働くために、正しく知識を身につけ、論理的に考え、患者さんから学ぶことを意識していきたいと思えます。



平成26年度医学部FD（教員研修）実施

医学教育センター長 福沢 嘉孝

平成26年8月5日（火）並びに10月16日（木）に医学部FD（教員研修）を実施しました。本年度のFDは、従来の宿泊型FDに代わって、初めて講演形式で開催しました。

両日ともに、特別講演及びグループ討論が行われましたが、活発な議論が繰り広げられ、本学の医学教育の向上に対して非常に有意義な時間を共有することができました。

WFME（世界医学教育連盟）による国際認証という

新しい医学教育の潮流の中で、「教員FD」の役割とその重要性は年々高まってきており、同時に本学における卒前医学教育への関心の高揚を感じています。微力ではありますが、本FDにより本学教員の医学教育に対する意識改革の進展に貢献できればと考えております。また、今後のFDにおける研修プログラムのより一層の充実を図りたいと考えておりますので、ご支援・ご協力の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

8月5日（火）

特別講演「秋田大学医学部における医学教育改善・改革」

講師：長谷川仁志教授（秋田大学医学部医学教育学講座）

グループ討論「愛知医大における医学教育の改善・改革の提案」

10月16日（木）

特別講演「医学教育におけるエビデンスの活用」

講師：錦織宏准教授（京都大学医学教育推進センター）

グループ討論「愛知医大におけるカリキュラムの改善・改革の提案」

わくわく体験リニモツアーズ 「“コードブルー”の世界 救急医療について学び、 考えてみよう！」開催

東部丘陵線（リニモ）の沿線施設の魅力を満喫し、学び楽しむイベント「わくわく体験リニモツアーズ2014」（東部丘陵線推進協議会主催）が、中学生以下の児童を対象に開催されました。

本学においても、平成26年8月11日（月）、12日（火）、20日（水）の3日間で「“コードブルー”の世界 救急医療について学び、考えてみよう！」と題した体験講座を開催し、多くの児童及びご父兄にご参加頂きました。

体験講座では、ドクターヘリの見学会、ドクターヘリに関する講演会、質疑応答が行われましたが、幸いにも全日程でドクターヘリの見学会を実施することができ、参加者は機体の迫力を間近で感じていました。

ドクターヘリに関する講演会は、救命救急科の医師及び看護師によるクイズ形式で行われ、ドクターヘリやフライトドクター、フライトナースの仕事などについて分かりやすく説明があり、参加者は皆、普段聞けない医療現場の話や、ドクターヘリの話に熱心に耳を傾けていました。

最後には、参加者全員にドクターヘリの特製ピンバッジが配布され、体験講座は盛況のうちに終了しました。



ドクターヘリの見学会



講演会の様子

眼科学講座 柿崎裕彦教授（特任） アジア太平洋眼形成再建外科学会 理事長就任

平成26年9月26（金）～28日（日）にインドのニューデリーで開催されたアジア太平洋眼形成再建外科学会において、眼科学講座の柿崎裕彦教授（特任）が同学会の理事長に就任されました。



この度、アジア太平洋眼形成再建外科学会(Asia Pacific Society of Ophthalmic Plastic & Reconstructive Surgery : APSOPRS)の理事長を拝命致しましたので、ここにご報告申し上げます。

眼形成再建外科学は、眼球付属器、すなわち「眼瞼・眼窩・涙道」を標的臓器とする眼科学の一分野です。視機能の保持は眼球だけで完結できるものではなく、眼球付属器が関与することによって始めて、その機能を十分に発揮することができます。逆に、眼球付属器に異状が生じた場合には視機能が低下しうるため、その治療は直接的な眼球の治療と同様、視機能の保持・改善に重要な意味をもちます。

APSOPRSの設立は2000年で、アメリカ（1969年設立）やヨーロッパ（1982年設立）のそれらと比べてかなり若い学会です。そのため、基盤整備が今なお、重要な課題となっています。また、アジア太平洋地域には発展途上国が多いため、多くの国で学会を組織できていません。このような国々に眼形成再建外科学会を作り、APSOPRSとして組織的にサポートすることが、これらの国々の患者を救う最善の方策と考えています。

また、webコンテンツを用いた教育ツールの充実もAPSOPRSの果たすべき責務の一つであり、これは医師の知識・技術を改善する有効な手段であると考えています。アジア太平洋地域では、眼形成再建外科学を専門とする医師が少なく、現在進行形で生じている問題に対処できない局面がかなりあります。手術ビデオや講演ビデオ、また、e-learningのようなコンテンツを充実させることによって、学術集会への参加が難しい医師たちの益となります。

今回のAPSOPRS学術集会は2016年の開催です。学生

諸君、研修医諸君で興味のある方は是非とも参加して下さい。学生・研修医の参加費は無料です。

さて、本邦の眼形成再建外科学はどうかと言えば、今年の4月によく日本眼形成再建外科学会（JSOPRS）が設立されたような状況です。僭越ながら、この学会でも理事長を拝命しております。

JSOPRSは、本学の三宅養三理事長の御尽力により、設立早々から日本眼科学会の関連学会となることができ、また、APSOPRSやアジア眼科学会とも関連をもつに至っております。昨年12月には、本学で第1回JSOPRS学術集会を開催しましたが、182名の参加者があり、また、海外から8名の著名な医師を講師として招聘し、さながら国際学会のような活況を呈しました。

三宅理事長には懇親会で乾杯の労をとって頂きましたが、本学が眼形成再建外科学発展の起点となるべく、その意気込みを示すことのできた学会でした。

我々の眼科学講座眼形成再建外科グループは、APSOPRSやJSOPRSの活動に積極的に関与しつつ、日々の診療にあたっています。

「世界への雄飛」。これは、今後の愛知医科大学の目指す方向ですが、我々もこの方向性を踏襲し、現在、韓国、インドネシアから留学生を受け入れ、英語が飛び交う中、診療・研究に充実した日々を送っております。

本学卒業生で眼形成再建外科学を専攻した先生はまだおりませんが、我々のグループでは新進気鋭の先生方の参加を切に期待しております。我々と共に世界へ雄飛しませんか。

以上、アジア太平洋眼形成再建外科学会の理事長就任の挨拶とさせていただきます。

（眼科学講座 教授（特任） 柿崎裕彦）

分子医科学研究所 杉浦信夫准教授 「新技術説明会」にて発表

平成26年9月30日（火）JST東京本部別館ホールにおいて、近畿・中部地区医系大学知的財産管理ネットワーク及びJST（独立行政法人化学技術振興機構）主催の新技術説明会が開催され、分子医科学研究所の杉浦信夫准教授が「コンドロイチン硫酸の糖鎖配列決定方法」（特願No.2014-141999）について技術説明を行いました。

新技術説明会は、企業と大学等公的研究機関との産学連携マッチングイベントであり、大学等の未公開特許（出願から1.5年未満）を中心とした最新の研究成果を発表者自らが技術内容も含めて分かりやすく説明するとともに、企業と発表者とが共同研究や技術導入などについて直接相談する個人面談の場も設けられています。



講演する杉浦准教授

高校生の一日看護体験研修実施

平成26年8月6日（水）に、愛知県内の県立東郷高校、名古屋市立名東高校、私立聖カピタニオ高校、私立栄徳高校の4校から29名の高校生の参加により、一日看護体験研修が行われました。

研修に先立ち、小池三奈美看護部長からあいさつがあり、「一日看護師」としての辞令交付を受けた後、ナース服に着替え各病棟にて看護業務の一部を体験しました。

初めは、緊張した面持ちでしたが、車椅子を引いたり、食事の介助をしていく中で少しずつ慣れたのか、次第に患者さんと会話している様子や、笑顔が見られるようになりました。

午後からのドクターヘリの見学では、間近で見るヘリコプターに興味をもち、写真撮影などをしていました。

研修終了後に行ったアンケート調査において、「すばらしい体験ができた。」「看護師さんの大変さがわかった。」「体力と機転が必要。」「将来看護師を目指したい。」「患者さんから感謝された。」などの意見があり、高校生たちにとっては新鮮で貴重な体験を通して命の尊さを学



参加学生での記念撮影

んでもらい、大変有意義で充実した研修となりました。

参加した高校生たちが今回の体験を通して、「看護」のすばらしさを理解し、将来は看護師を目指してくれることを願っております。

臨床研修指導医のための教育ワークショップ開催

平成26年8月23日（土）・24日（日）に東京第一ホテル錦で、今回で10回目となる臨床研修指導医のための教育ワークショップ（WS）が開催されました。

厚生労働省監督の下、この趣旨にそって開催されたこのWSには、院内から22名、学外から10名の計32名が参加しました。そのうちの13名は、平成16年度に施行された新医師臨床研修制度の下、臨床研修を修了した若手医師の参加でした。

春日井邦夫卒後臨床研修センター長を始め、池田洋教授（病理学講座）を中心とした運営陣に加え、学外からも公益財団法人世田谷区保健センター所長の中島宏昭先生、藤田保健衛生大学学長補佐（教育担当）の松井俊和教授をタスクフォースとしてお迎えし、「研修医にとって良い指導医とは」をテーマに2日間にわたりグループ作業を中心としたWSが行われました。

また、厚生労働省東海北陸厚生局からお招きした植村和正臨床研修審査専門官による特別講演、株式会社エスアールエル営業人材開発チームの浅田均主任研究員によるコミュニケーションスキル研修も行われました。



受講者からは、「研修医指導について深く考える機会となった。」「他科の先生方とお知り合いになれた。」「グループワークにて意見を出し合うことで、色んな考えを聞くことができた。」など活発な意見がありました。

このWSを受講された指導医の方々を核に、更なる臨床研修の充実が期待されています。

医療安全講演会開催

平成26年8月25日（月）午後5時30分から大学本館たちばなホールにおいて、医療安全講演会が開催されました。

今回で32回目となる講演会は、名古屋大学医学部附属病院医療の質・安全管理部長の長尾能雅教授を講師にお招きして、「全職員で取り組む医療安全～高いリスクと、信頼の中で～」と題してご講演頂き、744名が受講しました。

講演の中で長尾先生は、医療の安全性を高めるためにチームで取り組む戦略とその重要性について、医療従事

者がお互いを認め合い信頼することでチームとしての医療安全を醸成していくものであると説明され、分りやすく示唆に富んだ講演となりました。

当日受講できなかった職員については、講演の模様を録画したDVDの貸出しを行っておりますので、医療安全管理室（内線34258）までお問い合わせください。

医療安全管理室では、全ての職員に医療安全の意識高揚が図れるよう、今後もより実践的な研修会を開催していく予定です。

中部ブロックDMAT実動訓練への参加

平成26年10月11日（土）・12日（日）の2日間、愛知県庁、航空自衛隊小牧基地を始め、愛知県及び三重県の災害拠点病院を会場として、平成26年度中部ブロックDMAT実動訓練が開催され、県内外から医療関係者及び関係機関職員約480名が参加しました。

この訓練は、今後発生が予想される大規模災害の発生に際し、中部ブロック各県DMATが緊密な連携を図り、被災地における病院支援や広域医療搬送、救急医療等を迅速に実行する目的から開催されたものです。

同訓練には、病院医療従事者のみならず、航空自衛隊や陸上自衛隊、海上保安庁、消防、警察、中日本航空株式会社等の災害時に連携を密にする必要がある関係各機関からも参加がありました。

本院からは、救命救急科の中川隆教授及び救命救急センターの小澤和弘主任が愛知県庁に設置された愛知県DMAT調整本部にて運営を担当し、更には地域救急医療学寄附講座の井上保介教授（特任）をリーダーとしたDMATチーム5名が航空自衛隊小牧基地のSCU本部運営を担当しました。

SCU（staging care unit）とは、被災地内の病院等から集められた患者の症状の安定化を図り、自衛隊等の航空機による広域医療搬送のためのトリアージを行うことなどを業務とするところです。

参加者は、愛知県における医療搬送調整及び一新され



たEMIS広域災害救急医療情報システム（Emergency medical information system）と呼ばれるパソコン上のシステムに四苦八苦ししながらも、それぞれ真剣な眼差しで訓練に従事していました。

医療法の規定に基づく立入検査

医療法の規定に基づく厚生労働省・瀬戸保健所の立入検査が、今年（平成26年）10月17日（金）に実施されました。

午前中は、特定機能病院としての医療法関係規程等に基づく管理・運営状況、安全管理全般に関する実施計画、実施状況を中心に書類審査と各担当者との質疑応答が行われました。午後からは、厚生労働省東海北陸厚生局の医療監視員と愛知県医務国保課職員及び瀬戸保健所の各部門担当調査員による、病棟や薬剤部、臨床工学部等の視察と実地指導が行われました。

視察及び実地指導終了後、厚生労働省東海北陸厚生局医療指導監視監査官と瀬戸保健所長から今回の立入検査の講評が行われ、「概ね良好な運営状況であった。今後、病院全体の医療機器安全管理体制を構築して頂きたい。また、引き続き職員の健康診断の受診率向上に努めて頂きたい。」との要請がありました。

この講評の後、羽生田正行病院長代行から今回の指摘事項について、「ご指摘頂いた事項について真摯に対応し、早急に改善していきたい。」と抱負が述べられ、今年度の立入検査は終了しました。

第26回日本医師会認定産業医講習会を開催

産業保健科学センター長 小林 章雄

平成26年10月11日（土）に第26回日本医師会認定産業医講習会を開催し、88名の先生方にご参加頂きました。

今回は、「産業医活動の基礎と実際」をテーマに開催し、愛知労働局労働基準部健康課の林敏明課長に「労働衛生行政最近の動向について」として労働安全衛生法の改正を中心に講演頂き、続いて、聖隷健康診断センター所長の武藤繁貴先生には「職場巡視のポイント」として、実際の職場巡視のポイントについてご講演頂きました。

本学医学部衛生学講座の梅村朋宏講師には「化学物質

管理の要点」について、化学物質管理に関する法令、リスクアセスメントなどについて解説頂き、五藤労働衛生コンサルタント事務所長の五藤雅博先生には「職域呼吸器疾患の管理について」として、じん肺を中心に作業環境管理、作業管理、健康管理のポイントについて講演頂きました。

講習会には、県外からの参加者も少なからず見られ、多くの参加者が長時間にわたって熱心に受講されていました。

職場コミュニケーション向上研修実施

法人本部では、組織力向上を目指した人材育成を重要課題とし、職員研修を実施しています。

平成26年度は、職員それぞれの能力を発揮するため、職場内での良好なコミュニケーションが大切であり、自己と相手を大切にすることをテーマとした「職場コミュニケーション向上研修」を実施し、教職員280名が受講しました。

8月には、第1回目（本研修）として、講義とグループワークをとおしてコミュニケーションの知識を学び、職場での中間課題に取り組んだ後の9月には第2回目（フォロー研修）として講義を行い、取り組んだ課題の内容を振り返りながら学びを深めました。

受講した職員からは、「相手のことを考えて話すことの難しさを知りました。学んだことを活かして働きたいです。」（看護職員）とか、「誉めたり、元気づけたりできる、言葉をたくさん身に付けて使える様になりたい。」（医療職員）、「もっとこういう機会をつくってコミュニケーション力がつくようにしてほしい。」（医療職員）、「他部



署の方とコミュニケーションをとれるいい機会になりました。」（事務職員）といった感想があり、約87%の方から、「大変役立つ・役立つ」と回答を頂きました。

本学にとって、コミュニケーション力や接遇力の向上は重要なテーマであり、今後も継続して職員研修に取り組んでいく予定です。

新規採用事務職員 フォロー研修実施

事務部門では、平成26年9月19日（金）に平成26年度採用事務職員に対して、配属後半年間を一つの区切りとしたフォロー研修を実施しました。

採用から半年間の出来事について、各自で振り返りをした後グループで意見を共有し、同期のメンバーが半年間どんな気持ちで仕事に取り組んできたかを知ること、仲間の成長や互いに抱えている悩みについても共有しました。その後、4月に立てた行動目標の中で、「出来ていること」、「出来ていないこと」をまとめた上で、「挑戦していきたいこと」をグループワークで書き出し、これからの半年に向けた課題を明確にしていきました。

受講者からは、「この半年よりも次の半年で出来ることをもっと増やすために頑張りたい。」とか、「今やっている仕事は何につながるのかを考えて取り組みたい。」、「同期の間で共通の課題もあるので、情報や考え方を共有



して取り組んでいきたい。」といった感想がありました。

本学の将来を担う貴重な人材として、更なる成長と今後の活躍が期待されます。

医療職員・看護職員 目標管理による「職員人事評価制度」導入

人事評価制度の導入により、職員一人ひとりの能力や仕事の成果を適正に評価し、職員のやる気の向上や能力開発につなげ、また、面談等による指導・助言を通じてコミュニケーションの向上を図ることは、組織の活性化に必要不可欠なものとなっています。

本学では、職員人事評価制度を、平成26年度から事務職員に先行導入していますが、平成27年度からは医療職員や看護職員にも導入されることに伴い、今年度下半期が試行期間となっていますので、これら職員に対して「目標管理研修」及び「職員人事評価説明会」をそれぞれ開催しました。

目標管理研修

平成26年9月16日（火）午前・午後の2回にわたり、目標管理において中心的な役割を担う管理・監督者を対象とした研修を実施し、133名が受講しました。

研修では、目標管理に対する理解を深め、その意義と重要性を認識することと、実践的な目標設定のポイントについて演習やグループワークが行われました。



職員人事評価説明会

平成26年9月24日（水）と10月1日（水）の2日間にわたり、医療職員・看護職員を対象とした人事評価に関する説明会を開催し、430名（事前説明含む）が参加しました。

説明会では、評価スケジュールや具体的な目標設定・評価方法、手続き等について説明がありました。



平成26年度第1回ハラスメント防止講演会開催

ハラスメントの防止に係る啓発活動の一環として、平成26年8月7日（木）午後5時45分からC棟C202講義室において、平成26年度第1回目となるハラスメント防止講演会が開催され、34名が参加しました。

当日は講演会に先立ち、ハラスメント防止委員会委員長の岡田尚志郎医学部長から、「本学園では過去に実施したアンケート調査で、約15%の人がセクハラを経験したと回答されています。特に看護業務の方々の対応には難しいところもあると思いますが、本日の講演を聞いて、対応の仕方などの知識を得て頂ければと思います。」とのあいさつがありました。

講演会終了後に提出頂いたアンケートの結果、講演内容については「大変よかった（36%）」と「よかった（50%）」を合わせて86%の方から好評を頂きました。また、講演会に関しては「とても分かりやすく、予定の90分があっという間に終わった。」とか「行為者（加害者）に



自覚のない場合が時々あるため、周りの人達が早く対応することで未然に防止できるということが、よく理解できた。」などの感想がありました。

最後に監査室の方から、現在保有している「ハラスメント防止関係DVD」の学内貸出しを開始するので、職場研修用として活用頂きたい旨の案内がありました。

看護部 瀧井和子師長 平成26年度 愛知県看護功労者表彰受賞

看護部の瀧井和子師長が愛知県看護功労者表彰を受賞されました。

これは、看護職員として長年業務に従事し、顕著な功績のあった者に授与される賞で、表彰式は、平成26年5月12日（月）ウインクあいちにおいて開催された愛知県看護大会の席上で行われました。

表彰を受けた瀧井師長から「教育委員会委員として、年間教育計画の企画・運営を行い、後輩看護師の育成及び自身の看護の質向上に努めてまいりました。長い間の活動の評価が受賞となり、嬉しく思っております。多くの皆さまの暖かいご支援に心から感謝いたします。ありがとうございました。」と感想がありました。



看護部 小池三奈美部長 平成26年度 愛知県看護協会会長表彰受賞

看護部の小池三奈美部長が、平成26年6月24日（火）名古屋市公会堂で開催された愛知県看護協会総会において、愛知県看護協会会長表彰を受賞されました。

これは、愛知県看護協会会員として多年にわたり看護業務に精励されるとともに、協会活動に大きく貢献された功績が評価されたものです。

表彰を受けた小池部長から「愛知県看護協会会長賞という名誉ある賞を頂きましたこと大変に光栄に存じます。これも、皆さまのご支援とご協力の賜物と感謝いたします。愛知県看護協会の目的でもある看護の質の向上と地域の方々への健康増進を本院でも目指していきたいと思っております。」と感想がありました。



リハビリテーション部(兼 運動療育センター) 井上雅之理学療法士 日本ペインリハビリテーション学会優秀賞受賞

リハビリテーション部（兼 運動療育センター）の井上雅之理学療法士が、平成26年9月6日（土）・7日（日）に開催された「第19回日本ペインリハビリテーション学会学術大会」において、「優秀賞」を受賞しました。

これは、同学会の演題発表において、井上理学療法士が発表した「難治性の慢性痛患者に対する認知行動療法に基づく学際的グループプログラムの有効性について」が高く評価されたものです。

表彰を受けた井上理学療法士から「今回報告させて頂いたペインマネジメントプログラムは、運動療育センターと学際的痛みセンターのスタッフを総動員した共同研究であることから、チームとしての取り組みが評価された形となり、スタッフ一同、大変光栄に感じるとともに、このプログラムの治療効果をより高め、臨床に普及させ



ていく努力が必要であることを再認識しました。」と感想がありました。

救命救急科 中川隆教授 平成26年度救急医療功労者愛知県知事表彰 受賞

「救急の日」である平成26年9月9日（火）愛知県医師会館において、平成26年度救急医療功労者愛知県知事表彰に係る表彰式が執り行われ、本院救命救急科の中川隆教授が救急医療功労者愛知県知事賞を受賞されました。

同賞は、県民の福祉の増進に貢献し、その功績が特に顕著な方に贈られるもので、今回の受賞は、多年にわたり救急医療の向上に尽力されたことが評価されたものです。

受賞された中川教授から「救急医療はまさにチーム医療実践の場であり、これまでの私並びに本院の救急医療への取り組みに対し、愛知県から正当な評価を頂き身に余る光栄です。「しかし、時として誤った評価が下される



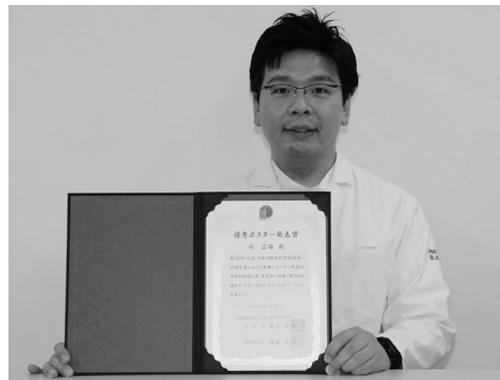
という非常に残念なこともしばしばあり得ることを考えれば、このように正しく評価頂ける限り、この世もまんざら捨てたものではありません。」と感想がありました。

歯科口腔外科 林富雄助教（医員助教） 第59回（公社）日本口腔外科学会総会・学術大会 優秀ポスター発表賞（ゴールドリボン賞）受賞

歯科口腔外科の林富雄助教（医員助教）が、平成26年10月17日（金）から19日（日）幕張メッセで開催された「第59回（公社）日本口腔外科学会総会・学術大会」において、「優秀ポスター発表賞（ゴールドリボン賞）」を受賞しました。

これは、同学会のポスター発表において、林助教（医員助教）が発表した「口腔癌に対する戦略的免疫治療法の検討」が学術的に高く、同学会の発展に寄与する優れた内容であると評価されたものです。

表彰を受けた林助教（医員助教）から「栄えある賞を頂き、大変光栄に思っております。ご指導頂きました歯科口腔外科の風岡宜暁教授、山田陽一准教授、高度研究機器部門の吉川和宏教授（特任）、腫瘍免疫寄附講座の上田龍三教授、鈴木進准教授に改めて御礼申し上げます。



今後は、口腔癌治療に対する免疫治療法を確立すべく、臨床・研究に精進していきたく思っております。」と感想がありました。

寄附目録贈呈式挙行

平成26年9月26日（金）午後2時から、大学本館4階役員会議室において、一般財団法人愛知医科大学愛恵会の寄附目録贈呈式が執り行われました。

これは、愛恵会が、公益法人制度改革により、財団法人から一般財団法人へと移行した際に策定した「公益目的支出計画」に基づいて、地元長久手市を中心に社会貢献活動を行っている「社会福祉法人長久手市社会福祉協議会」と「社会福祉法人日本介助犬協会」の2団体にそれぞれ500万円の寄附を行ったものです。

贈呈式には、（一財）愛知医科大学愛恵会の山岸赳夫理事長を始め8名、社会福祉法人長久手市社会福祉協議会から加藤勝会長始め3名、社会福祉法人日本介助犬協会から大島慶久理事長始め4名に介助犬のキャロル（女の子）が出席し、山岸理事長のあいさつの後、それぞれの代表者に寄附の目録の贈呈が厳かに行われました。

その後、寄附に対する感謝の気持ちとして、長久手市社会福祉協議会から感謝状、日本介助犬協会から感謝の盾の贈呈がありました。

結びに、学校法人愛知医科大学の三宅養三理事長（愛



寄附目録贈呈式

（左から三宅理事長、大島理事長、山岸理事長、加藤会長）

恵会理事）のあいさつがあり、寄附目録贈呈式を終了しました。

贈呈式終了後は、会場を移し、懇談形式で意見交換等がなされ、終始和やかな雰囲気それぞれの団体の現在の活動状況と寄附の用途等について説明がありました。

その間、介助犬のキャロルは、おとなしく一緒に聞き入っているようでした。キャロルのような介助犬が育つことが楽しみに待たれます。

主催公演事業

第1回主催公演事業

オユンナ トーク&コンサート開催

平成26年6月23日（月）中央棟2階の外来レストランにおいて、「オユンナ トーク&コンサート」を開催しました。

シンガーソングライターのオユンナさんが平成26年5月9日の新病院開院を記念し、最初の曲は「いい日旅立ち」に始まり、その後は、オユンナさんの生まれた国モンゴルのことなど、来場者の質問にも応えながらのトークショーとなりました。

2曲目からは、デビュー曲「天の子守歌」、 「ヒロシマの少女折鶴」などを熱唱、入場者からは、飲食しながら楽しめるコンサートということもあって、盛り上がり、「やすらぎと贅沢なひと時を過ごすことができました。」との声も頂きました。



第2回主催公演事業

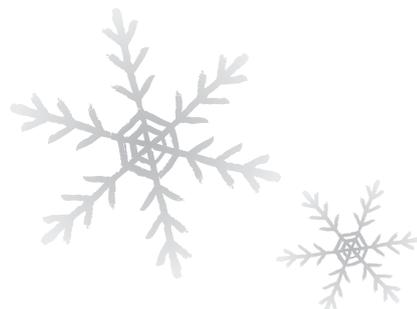
映画「アナと雪の女王」特別上映会開催

平成26年7月22日（火）大学本館たちばなホールにおいて、「アナと雪の女王」の特別上映会を開催しました。

世界中で大絶賛・大人気の映画上映について関係者と調整したところ、タイミングの良さもあって夏休み早々に上映の運びとなりました。

開演の60分程前には、10数名の児童が並んだこともあって、急遽入場時間を繰り上げるなどのハプニングがありました。

会場は親子連れが多く、約270名の方の入場があり、映画上映後は、皆さんとともにこやかな笑顔で会場を後にされました。



学 術 振 興

学 位 授 与

◆大学院医学研究科



正田 哲雄

学位授与番号 甲第437号

学位授与年月日 平成26年9月30日

論文題目：「Cell type-dependent effects of corticosteroid on periostin production by primary human tissue cells（組織細胞におけるペリオスチン産生とステロイド剤の効果）」



加藤 大貴

学位授与番号 乙第366号

学位授与年月日 平成26年9月11日

論文題目：「Feasibility and safety of intracoronary nicorandil infusion as a novel hyperemic agent for fractional flow reserve measurements（部分冠血流予備量比測定にて最大充血を得るための代替薬としてニコランジル冠注における有用性と安全性の検討）」



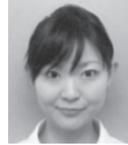
杉田 威一郎

学位授与番号 乙第367号

学位授与年月日 平成26年9月11日

論文題目：「Comparative Analysis of Hyaluronan's Affinity for Antivascular Endothelial Growth Factor Agents（種々な抗血管内皮増殖因子薬に対するヒアルロン酸の親和性の比較解析）」

◆大学院看護学研究科



藤澤 希美

学位授与番号 第66号

学位授与年月日 平成26年9月29日

論文題目：「精神科デイケア利用者が語る回復過程と支援－病いとの出会いからデイケア利用までの体験を通して－」

研究助成等採択者

○一般社団法人日本損害保険協会

2014年度交通事故医療に関する一般研究助成

●氏名 岡田洋平（内科学講座（神経内科）・准教授（特任））

研究題目 ヒトiPS細胞由来神経幹細胞のゲノム不安定化と造腫瘍性を規定する因子の検討

助成金額 1,000,000円

●氏名 大須賀浩二（脳神経外科学講座・教授（特任））

研究題目 複雑局所性疼痛症候群I型の慢性痛に対する海馬でのmitogen-activated protein kinase活性化の作用機序

助成金額 820,000円

○公益財団法人武田科学振興財団

2014年度医学系研究奨励

●氏名 岡田洋平（内科学講座（神経内科）・准教授（特任））

研究題目 神経分化に伴うゲノム不安定化を指標としたヒトiPS細胞の新しい品質評価法の開発

助成金額 2,000,000円

○公益信託第24回日本医学会総会記念医学振興基金

平成26年度海外学会等参加費用援助

●氏名 幡野その子（分子医科学研究所・助教）

学会名称 ESC Congress 2014

助成金額 300,000円

●氏名 永井麻矢子（歯科口腔外科・助教（専修医））

学会名称 22nd Annual International Cancer Immunotherapy Symposium CANCER IMMUNOTHERAPY

助成金額 300,000円

○公益財団法人愛知県がん研究振興会

第39回（平成26年度）がんその他の悪性新生物研究助成

●氏名 高見昭良（内科学講座（血液内科）・教授）

研究題目 同種造血細胞移植関連免疫調整遺伝子多型の機能解明

助成金額 250,000円

●氏名 高村祥子（感染・免疫学講座・教授）

研究題目 脂質応答制御によるB細胞リンパ腫制御

助成金額 250,000円

○公益財団法人大幸財団

平成26年度（第24回）自然科学系学術研究助成

●氏名 佐藤元彦（生理学講座・教授）

研究題目 加齢黄斑変性症における網膜血管新生機構の検討

助成金額 3,500,000円

第31回（平成26年度）学会等開催助成

●氏名 柴田英治（衛生学講座・教授（特任））

学会名称 第48回中小企業安全衛生研究会全国集会

助成金額 70,000円

○公益財団法人日東学術振興財団

第31回（平成26年度）研究助成

●氏名 林 寿来（生理学講座・講師）

研究題目 血管新生におけるG蛋白活性調節因子の研究

助成金額 1,000,000円

第31回（平成26年度）海外派遣助成

●氏名 全並賢二（泌尿器科学講座・助教）

研究題目 トランスポーターシステムを用いたp16機能性ペプチド導入による腎細胞がんに対する新しい分子標的治療

助成金額 300,000円

○公益財団法人鈴木謙三記念医科学応用研究財団

平成26年度調査研究助成

●氏名 増渕 悟（生理学講座・教授）

研究題目 効果的な時間治療のための癌組織とホスト個体の概リズム相互作用の解明とモデル開発

助成金額 1,000,000円

外国人研究員のご紹介

本学において研修するため、外国人研究員として来学された方をご紹介します。(敬称略)



リン オンチ
林 音知

国籍：中国

現職：瀋陽薬科大学研究員

受入講座：薬理学講座

研究期間：H26. 9. 13～H27. 3. 31（7か月）

研究課題：炎症疾患およびがんを抑制する低分子生理活性物質の探索

(オンチさんからの一言)：I was lucky enough to meet Prof Umezawa and he kindly introduced me to Aichi Medical University (AMU) working as a foreigner researcher experiencing this wonderful university. It's a great pleasure to have a research experience abroad in AMU. This sophisticated university is beautifully organized. Walking around the pretty lake near the research building can totally open the mind through experiencing the classical Japanese Cherry Blossom's beauty. The lawn behind the research building is neatly assembled with benches and it is a nice place to enjoy lunch and relax. Besides the enjoyable environment, the professors and staff at AMU are extraordinarily nice. They are always ready to offer their warmhearted assistance to make you feel at home. The professors are not only professors, but also can be your family whenever you need help in your everyday life. Doing Research at AMU is extremely exciting. When struggling with research problems, highly qualified and experienced professors are happy to discuss the problems with us and give useful suggestions. Researchers here can do experiments as we wish because AMU is equipped with the most advanced laboratory apparatus. Being supported in a collaborative atmosphere and well established department is very convenient for experiments. Therefore, AMU is really an ideal university to fulfill your research ambitions.



ヘーラ カン
Hyera Kang

国籍：韓国

現職：Presbyterian 医療センター
眼科学講座主任医師

受入講座：眼科学講座

研究期間：H26. 9. 13～H27. 9. 12（1年）

研究課題：1. 甲状腺眼症に対する手術治療において、より合併症のおきにくい術式の開発
2. 涙道における涙液再吸収機構の解明

(カンさんからの一言)：I am Hyera Kang from Korea. It's a great pleasure to have an opportunity to be as a research fellow in Aichi Medical University. I'm very thankful to prof. Iwaki, the head of Ophthalmology, and prof. Kakizaki, the division of the ophthalmic plastic and reconstructive surgery (OPRS). I have known prof. Kakizaki through his worthy articles and achievements of OPRS. I have hoped to study the OPRS with his team. I've been here only for two weeks when I write this article. It was too short to know the system of hospital, medical care and patients' service. However, I'm deeply impressed to the well-organized medial system with consideration for the patients. I'm very happy I can learn the OPRS here in Aichi Medical University. I am sure that this precious experience will bring me a great blessing. I'm really grateful to all concerned.



ア ク マ ド ジュアンディー
Achmad Juandy

国籍：インドネシア

現職：インドネシア大学キプト・
マングンクスモ病院眼科医師

受入講座：眼科学講座

研究期間：H26. 10. 1～ H26. 12. 29（3か月）

研究課題：涙道海綿状構造の位置的な相違についての研究
(ジュアンディーさんからの一言) : I am Achmad Juandy from Indonesia. I appreciate the Ophthalmology Department of Aichi Medical University, especially Professor Iwaki & Professor Kakizaki, to have accepted me as a research fellow to study the ophthalmic plastic & reconstructive surgery. This is the first time I visit Japan. When I arrived at Japan, I felt tremendous confusion. Different language, culture and new environment felt me difficult to interact with people, but those did not stop me. I was able to adapt to Japan by its hospitality and willingness. Aichi Medical University is a nice hospital. I always feel comfortable by the environment and atmosphere, especially the beautiful lake and trees. As well, Aichi Medical University has very high technological equipment not only for medical treatment and examination but also for education and research. Professor Kakizaki performs a lot of surgeries. On the first day of my fellowship, I observed seven operations from morning till late at night ! It was a good start. Enhancing knowledge and technique of the oculoplastic surgery is the purpose of my fellowship. I am happy to have the best teacher with good environment. I would like to enjoy learning the oculoplastic surgery at Aichi Medical University. In the future, I hope to have tighter relationship with this good team and the wonderful university.



本学講座等の主催による学会等

【学会名】	【開催日】	【会長等】
・第57回日本消化器内視鏡学会東海支部例会	平成26年9月6日（土）	春日井邦夫
・第25回愛知眼科フォーラム	平成26年9月7日（日）	中川 隆
・第57回日本感染症学会中日本地方会学術集会	平成26年10月23日（木）～25日（土）	三嶋 廣繁

第57回日本消化器内視鏡学会東海支部例会

平成26年9月6日（土）名古屋国際会議場2号館において、第57回日本消化器内視鏡学会東海支部例会が、本学医学部内科学講座（消化器内科）の春日井邦夫教授を会長として開催されました。

本学会は、消化器関連の学会の中でも最大規模の地方会で、東海4県から消化器内視鏡関係の多くの先生方が参加されます。

今回は、シンポジウム「消化器内視鏡診断の工夫とコツ」（15演題）と地方会では新たな試みとなるビデオワークショップ「消化器内視鏡治療の新展開」（14演題）に加え、一般演題（67演題）、特別講演、ランチョンセ

ミナー1・2から構成され、当日は401名の参加者を得て、盛會理に終えることができました。

また、午前中に行われた若手研究者優秀演題奨励賞選定セッションでは、本学消化器内科所属の3名の医局員が優秀演題に選ばれました。医局員の日々の努力の賜物と自負するとともに、今後の弛まぬ努力への思いを新たにさせられました。

末筆となりましたが、本学会の開催に当たり関係者の皆さまより多大なるご支援とご協力を賜りましたことを心より御礼申し上げます。

第25回愛知眼科フォーラム

愛知眼科フォーラムは、本学眼科学講座が主催し、一般眼科医に公開している眼科全般の学会であります。

毎年1回開催を慣行しており、本年度は第25回大会、4半世紀の記念すべき大会を迎え、平成26年9月7日（日）に名古屋市中区栄の興和株式会社本社ビルにおいて開催されました。

当日は、本学医学部眼科学講座と関連病院から15題の一般演題の発表があり、いずれも高度な眼科医療、高い水準の研究を示すもので、活発な質疑応答もあって盛會

でありました。

特別講演では、2名の演者、埼玉医科大学の板谷正紀教授と本学眼科学講座の柿崎裕彦教授（特任）から、それぞれ「緑内障による失明を防ぐために」と「眼形成外科アラカルト～眼瞼・眼窩・涙道疾患の基礎と治療～」と題した講演が行われました。

参加者は最新眼科の診断法と治療法について多くの知識を深め、意義ある会とすることができました。なお、参加者は78名でした。

第57回日本感染症学会中日本地方会学術集会

平成26年10月23日（木）から25日（土）の3日間にわたり、岡山市の岡山コンベンションセンターにおいて、第57回日本感染症学会中日本地方会学術集会が、本院感染症科・感染制御部の三嶋廣繁教授を会長として、第62回日本化学療法学会西日本支部総会及び第84回日本感染症学会西日本地方会総会（両学会会長：尾内一信教授（川崎医科大学小児科学））との3学会合同で、合同学会のメインテーマを「グローバル化とトランスレーショナルリサーチの方向性を考えよう～調和と協調、そして未来へ～」として開催されました。

学会の参加者は、臨床医師、薬剤師、臨床検査技師、看護師に加え、様々な分野の研究者、行政に関わっている方々、製薬会社並びに検査の会社の方々など合計

1,347名にも及び、近年の同学会と比較しても多くの方々に参加して頂きました。

今回の学会が、感染症学会中日本及び西日本地方会、化学療法学会西日本支部にとって初の合同学会として開催できたことは、両学会の今後の協調並びに発展に寄与できるものと考えています。

今回の学会開催にあたっては、一般財団法人愛知医科大学愛恵会を始めとして、岐阜大学医学部産科婦人科同門会、各種企業からご支援を頂きましたことに改めて感謝申し上げます。

また、学会主催にあたりご協力頂きました教室の関係者並びに各企業の方々にもお礼を申し上げます。

規 則

規則の制定・改廃情報をお知らせします。

職員人事評価規程施行細則の一部改正

学校法人愛知医科大学職員人事評価規程施行細則の一部が改正され、平成27年度から、医療職員及び看護職員に対して目標管理が実施されることとなりました。

施行日は平成27年4月1日

学校法人愛知医科大学経理規程の一部改正

学校法人会計基準の改正（平成27年4月1日施行）に伴い、本学の経理基準についてもこれに対応するため、学校法人愛知医科大学経理規程の一部が改正され、決算書類等が整備され、平成27年度以降の会計年度に係る会計処理及び計算書類の作成から適用されることとなりました。

施行日は平成27年4月1日

医学部教員選考規程の一部改正

愛知医科大学医学部教員選考規程の一部が改正され、准教授及び講師の採用等に係る選考委員会の構成等が整備されました。

施行日は平成26年9月1日

病院規程の一部改正等

病院に設置されている病院経営企画室の位置付けを明確にするため、次の関係規則が整備されました。

施行日は平成26年10月1日

【一部改正】

- ・愛知医科大学病院規程

【新規制定】

- ・愛知医科大学病院病院経営企画室規程
- ・愛知医科大学病院病院経営企画推進委員会規程

【廃止】

- ・愛知医科大学病院病院経営企画室設置要綱

医療安全に係る患者相談窓口設置要綱の一部改正

病院における土曜日外来休診及び診療時間帯変更に伴い、医療安全に係る患者相談窓口設置要綱の一部が改正され、患者相談窓口の対応時間が整備されました。

施行日は平成26年8月15日

「看護学部事務部事務分掌について」の全部改正

平成26年9月16日付けで「看護学部事務部事務分掌について」（法人本部長・事務局長裁定）が全部改正され、学生・教員の利便性向上、事務の効率化等を図るために、3課体制（総務課、教学課、学生支援課）に改組されました。

施行日は平成26年9月16日

看護実践研究センター認定看護師教育課程設置規程等の一部改正

日本看護協会が定める認定看護師教育基準カリキュラム、実務研修内容基準等の改正に伴い、愛知医科大学看護学部附属看護実践研究センター認定看護師教育課程設置規程及び愛知医科大学看護学部附属看護実践研究センター認定看護師教育課程細則の一部が改正され、入学資格、授業科目等が整備されました。

施行日は平成27年4月1日（一部は平成26年9月1日）

知識を知恵に換える思考のすすめ：部品から全体像を捉える

薬理学講座 教授 岡田尚志郎

医学教育のグローバルスタンダードを目指して

医学の急速な進歩は、学部学生の取得すべき知識量を指数関数的に増大させており、単なる知識の詰め込みだけでは、全ての学習範囲をカバーしきれないところにまできています。しかし、戦後から平成10年頃まで続してきた我が国の医学教育は、基本的には(1)講座縦割りの講義、(2)見学型臨床実習、(3)評価法としての大項目筆記試験に代表される知識詰め込み型の教育であり、グローバルスタンダードとはいささかかけ離れているものでした。ところが、平成22年9月米国ECFMG (Educational Commission for Foreign Medical Graduates) は、2023年までに日本の医学教育が世界医学教育連盟の提案する国際認証を受け、国際的基準に合致したものにすべきであると宣言しました。この宣言は「ガラパゴス化している日本の医学教育」をグローバルスタンダードともいえる「アウトカム基盤型医学教育」へと大きく変革させるきっかけとなりました。

ところで、薬理学は「作用機序の明らかな薬物ツールとして生体の調節機構を解明する」学問であり、基礎生命科学の一分野であると同時に、臨床医学とも双方向の関係にあります。では、薬理学教育のグローバルスタンダードを考えると、教育成果であるアウトカムはどう設定すれば良いのでしょうか。

多くの薬物名を覚えていることでしょうか？受容体下流のシグナル伝達経路を暗記していることでしょうか？否、「薬物の作用機序を理解できれば、疾病の病態生理を理解することができる」という、まさに基礎・臨床の接点としての薬理学の醍醐味を習得していることではないでしょうか？

点と点を結んで線を創り、線と線から面を創ってゆくように、薬物というツールを使って部品から全体像を捉えるという論理的な思考を習得することは、世界中のどこでも通用するアウトカムであると言えます。学生諸君が薬理学の講義を通じて、知識を知恵に換える思考を身につけてほしいと願っています。



世界に発信する医学研究

薬理学講座では、現在大きく二つの研究プロジェクトが進んでいます。

一つは、石川直久前学長が発見された新規生体内タンパク質Naofenの生化学的解析です。最近、局所麻酔薬のBupivacaineが神経系由来の培養細胞にNaofenの発現を誘導する機序として、Bupivacaine→CAMKK→AMPK→P38MAPK→NFκB→Naofen発現↑という一連のシグナル伝達経路が明らかとなり、2編の論文として発表できました。もう一つは、ストレスによる中枢性交感神経-副腎髄質系賦活機構の薬理的解析です。これまでの薬理学的実験成績から、ストレス応答の制御中枢の一つである視床下部室傍核におけるプロスタグランジンE₂受容体刺激によって血中ノルアドレナリンが増加し、トロンボキサン受容体刺激によって血中アドレナリンが増加することが分かってきました。

最近、本学に設置されている最新のLC/MS装置を用いて、ラット視床下部室傍核の透析液中プロスタグランジン類を6種類、同時に測定できる実験系を確立しました。この系を用いて、ストレス時における当該部位の内因性プロスタグランジンの関与を明らかにすることができ、論文として発表しました。

今後は新しく加わったメンバーとともに、形態学的なアプローチを取り入れた実験も進めてゆきたいと考えています。

講座からの一言

基礎医学の研究者は、興味深い現象に対して、まず仮説を立て、検証するために実験を行い、結果をまとめて論文にして世に問うという一連のサイクルをひたすらやり続けることのできる人種です。と言うと、ちょっと奇異な人種かと思われるかもしれませんが、4学年次生の有志とファーマコロジーを論じる会、略してコロンジル会を1~2か月に一回程度開催して、お勉強+aを一緒に楽しむという面も持ち合わせています。

モットーは「フリー・フェア・オープン」です。興味のある学生はいつでもウエルカムです。

